

学校支援活動における意味づけの重要性 ——地域コーディネーターの活動の展開に着目して——

西村 彩恵*・西村 吉弘**

The Importance of Implication in the School-Support Activity Focusing on the Development of Regional Coordinator's Activities

Sae NISHIMURA, Yoshihiro NISHIMURA

要 旨

昨今、学校と地域の連携は、「学校・家庭・地域の連携による教育支援活動促進事業」の学校支援地域本部事業の中で、組織的な連携活動が展開されている。この事業は、学校と地域の力をマッチングし、組織的に且つ効果的な教育活動の展開による教員の負担軽減や地域の教育力の向上を目的に実施され、2014年度では619市町村、3,746本部で実施されていた。また、学校と地域の活動推進のため地域コーディネーターが配置され、主に学校と地域に精通するPTA役員経験者、退職教職員、自治会等の地域住民組織の関係者が担っている。

本稿では、栃木県X市Y中学校区のZ小学校の学校支援活動の事例を取り上げる。Y中学校区の学校支援地域本部は、1中学校3小学校で構成され、各学校にコーディネーターが配置されている。その中の1つであるZ小学校では、本部事業の実施を契機に学校支援活動を開始し、コーディネーターは教員経験やPTA活動の経験を生かし、児童、教員、ボランティアからの反応を確認しながら活動を進めていた。また、Y中学校区内の学校支援活動や広報活動を展開する際に、次第に試験的な活動を行うなど本部事業の取組みの起点となっていた。Z小学校のコーディネーターの意識を追うと、活動の中で学校や地域への自身の理解を深めながら、自分の経験を活動に生かしていたことが伺えた。

以上から、第1にコーディネーターの活動の展開と意識を整理し、意識変化の起点を抽出する。第2にコーディネーターの意識変化の要因を検討し、コーディネーター自身が活動を意味づけることの重要性を考察する。

キーワード：学校支援、地域コーディネーター、意味づけ、学校と地域の連携

*助教 社会教育学・生涯学習論

**文部科学省 国立教育政策研究所 教育行政学、教育政策

1 はじめに

昨今、学校と地域の連携は、「学校・家庭・地域の連携による教育支援活動促進事業」の学校支援地域本部事業（以下、本部事業と略）の中で、組織的な連携活動が展開されている。本部事業は、学校と地域の力をマッチングし、組織的且つ効果的な教育活動の展開による教員の負担軽減や地域の教育力の向上を目的に実施され、2014年度では619市町村、3,746本部（小学校6,244校、中学校2,814校）で実施されていた。学校と地域の活動推進のため、主に学校と地域に精通するPTA役員経験者、退職教職員、自治会等の地域住民組織の関係者が地域コーディネーター（以下、コーディネーターと略）として配置された。2013年度では、全国で約8,300人（1学校に平均1人、1本部に平均2人）が、学校と地域の要望の把握、連絡調整、活動の提案等を行い、学習支援活動や環境整備等の学校支援活動を支えていた¹。また、活動する学校支援ボランティア（以下、ボランティアと略）は、約115万人（1学校に平均133人、1本部に平均326人）であり、全国の公立小中学校の中での実施率は約28%となるなど²、学校と地域との連携活動の取り組みへの関心の高まりが見られる。

近年、本部事業に関する調査研究も蓄積されてきており、児童生徒の学習活動を推進する際のコーディネーターの役割を児童生徒、教職員、コーディネーター、地域住民へのアンケート結果から分析したもの（中川・山崎・深尾、2012）や、学校と地域との関係を生徒、教員、ボランティアへのアンケート結果から分析したもの（大久保・時岡・平田・福圓・江村、2011）、学校支援地域本部とコミュニティ・スクールとの連携の実態から分析したもの（志々田・熊谷・天野・佐々木、2014）などが見られ、本部事業におけるコーディネーターの役割や組織化の必要性、学校支援地域本部内の地域教育協議会と学校運営協議会などの組織間の連携の重要性が指摘されている。

その中で、畠中（2011）は新潟県新潟市の「地域と学校パートナーシップ事業」を取り上げ、教員経験を持つコーディネーターの役割について、信頼、規範、ネットワークの3つの要素を基礎とする利用可能な資源をソーシャル・キャピタルとして位置づけた上で、ボランティアの開拓、学校と地域のニーズの掘り起こしやニーズに対応した活動、ボランティアへの支援活動を分析した。その結果、コーディネーターの役割として、学校が見つけにくい地域人材を発掘・整理した上で、学校と地域との良好な関係を構築・維持することによって、ソーシャル・キャピタルが形成され、学校支援活動を効果的に機能させることができると指摘する。

また、佐藤（2012）は大分県佐伯市の「地域協育振興モデル事業」を取り上げ、コーディネーターの力量形成を図るための施策について、6名のコーディネーターへのインタビュー調査を

学校支援活動における意味づけの重要性

行い、コーディネーターの経歴、活動内容に基づく役割、活動を通じたコーディネーターの学習、研修内容を中心に分析した。その結果、コーディネーターは、「多くの経験から多くの学習を引き出せる人材であること」が重要であり、日常的にコーディネーターの相談に対応可能な人員配置や環境整備を行い、またそれを支える取り組みとして高等教育による支援を含む政策的支援の必要性を指摘している。

これらの指摘は、コーディネーターを配置する意義や活動の環境整備の必要性を検討する上で重要だと考えられる。しかしながら、コーディネーターが培ってきた経験や活動するための意欲を持っていたとしても、それらを実際の活動に十分に活かせるとは限らない。その上、コーディネーターを引き受ける際の状況や、個人が持つ経験もまた異なることを考慮すると、コーディネーターが積み重ねた経験から学習を引き出すためには、学校と地域との関係だけでなく、自分の活動状況を受け止める中で、コーディネーター自身が自分にとっての活動の意味を見出してはじめて可能となるのではないだろうか。また、活動を意味づけることによって、コーディネーターの役割そのものの理解が深まり、自身の経験を生かしたコーディネートへと繋がっていくのではないだろうか。

そこで本稿では、栃木県 X 市 Y 中学校区の Z 小学校の学校支援活動の事例を取り上げる。Y 中学校区の学校支援地域本部は、1 中学校 3 小学校で構成され、各学校にコーディネーターが配置されている。その中の 1 つである Z 小学校では、本部事業の実施を契機に学校支援活動を開始し、コーディネーターは戸惑いながらも教員経験や PTA 活動の経験を生かして、児童、教員、ボランティアからの反応を確認しながら活動を進めていた。Y 中学校区内の学校支援活動や広報活動を展開する際に、次第に試験的な活動を行うなど本部事業の取組みの起点となっていた。Z 小学校のコーディネーターの意識を追ってみると、活動の中で学校や地域への理解を深めながら、自身の経験を活動に生かしていたことが伺えた。

以上から、第 1 にコーディネーターの活動の展開と意識を整理し、意識変化の起点を抽出する。第 2 にコーディネーターの意識変化の要因を検討し、学校支援活動における意味づけの重要性を考察する。

2 栃木県 X 市 Y 中学校区の学校支援地域本部事業の概要と Z 小学校の活動内容

2.1 学校支援地域本部事業の概要

X 市立 Y 中学校区学校支援地域本部は、2008 年度から文部科学省の委託事業として始まり、委託事業終了後も活動を継続しており現在 8 年目である。コーディネーターの配置数は計 5 名

であり、2013年度の活動回数は計147回、ボランティアの参加者数は延べ978名である⁴。活動内容は、①学習支援、②体験学習の支援、③環境整備の支援、の3つに大別される。基本的に、コーディネーターが学校の要請を受け、ボランティアの選定、教員との活動内容や調整等の支援を行っている。各校のコーディネーターは、隔週で開催されるY中学校に設置された「コーディネーター委員会」の中で、活動状況の確認等を実施していた⁵。

本稿で着目するZ小学校は、児童数432名、16学級であり、教職員は30名である（市費負担教職員5名、非常勤講師1名含む）。PTA会員数は、353名であり、本部事業開始前から民話等のボランティア活動が行われていた⁶。活動内容を見ると、表1に示した通り2012年度を例にとると計10の活動が行われ、参加者数は延べ61名である。活動回数は、計100回であり、「①読み聞かせ」、「⑤算数支援」は年間を通し実施され、また「⑥国語支援」は5か月にわたり活動が行われた。それら以外の7つの活動は、1回から3か月程度である。これらの活動は、Y中学校区の広報とは別に「Z小学校ボランティア新聞」を定期的に発行し、広報活動を積極的に展開している⁷。

表1 Z小学校ボランティア活動内容（2012）³

活動内容	参加者数	活動回数	期間
①読み聞かせ	17	17	1年生から4年生：5月14日～2月25日 5年生・6年生：7月2日～2月25日
②吹奏楽	5	25	6月15日～9月6日
③茶道体験	9	3	9月25日、10月16日～17日
④学習支援	4	2	7月25日、8月2日
⑤算数支援	1	24	5月14日～2月1日
⑥国語支援	1	24	9月27日～2月1日
⑦民話	3	1	1月29日
⑧人形劇	8	1	1月19日
⑨昔遊び	9	1	1月30日
⑩町探検	4	2	6月15日、6月26日
計	61	100	

※「Z小学校ボランティア活動記録」（2012）参照。

2.2 インタビューの概要と研究方法

本稿では、Z小学校のコーディネーター1名（以下、Kさんと略）のインタビュー記録を素材とする⁸。インタビューは半構造化面接法を用い、2014年8月19日、10月17日、10月31日、12月25日に4度実施した。第1回の調査は、Kさんと他のコーディネーター1名の2名に対し、グループインタビューを行った。第2回から第4回の調査は、個別のインタビューの形態で実施した。調査は、全てKさんの自宅で行い、調査時間はいずれも2時間程度である。インタビュー記録は、談話分析を用いて検討する。尚、内容を補足するものとして、本部事業の活動記録を併用する。

Kさん（40代女性）は、中学校の教員を退職後に前任者から就任要請を受け、2009年9月に就任した。2010年3月まで前任者と共に活動を行い同年4月から単独で担い、自身の教員経験を踏まえた一定の学校理解のもと、2013年3月まで3年6か月活動した。また、在任中に育成会役員やZ小学校PTA役員を引き受け活動していた経験を持つ。コーディネーター退任後は、Z小学校を中心にボランティアとして活動に関わり続けている。Kさんの活動経緯や意識を見ると、活動当初は小学校からの依頼を引き受け実行するという、受動的な姿勢であった。だが、次第に学校やボランティアに主体的に働きかけるようになり、活動を通して自身の教員経験や地域活動経験もふり返っている様子が垣間見られた。

3 Kさんの活動経緯と意識

本章では、Z小学校における活動の展開と意識を確認する。その際、6点の資料（以下、活動記録1～6と表記する）を活用する⁹。主な活動経緯は、表2に示す通りである。Kさんの意識変容は3期に分けられ、各区分に基づきまとめる。

3.1 第1期—本部事業の意義とZ小学校での活動の意義との相克—

3.1.1 コーディネーター就任

Kさんは、2009年9月の就任当初、「何をどう進めるのか仕事内容が見えず、頼まれたことをやるという消極的な姿勢」（活動記録2）で、前任者と活動を始めた。その際、「前任者が知り合いを活動に誘い、ボランティアに参加させる人選の仕方に疑問」（活動記録1）を持ち、「他校の各コーディネーターの意識・意欲の違いを感じ」ながら（活動記録2）、模索する日々が続いた。

2010年2月、前任者の担当の活動が全て終了し、年度末を待たず引き継ぎが行われた。当

表2 コーディネーターの主な活動経緯

区分	実施時期	事項（小括弧は、活動対象の教科、学年）
第1期	2009年9月	コーディネーター就任
	2009年9月～2010年3月	前任者と共にZ小学校打合せに参加
	2010年4月	1人体制スタート、読み聞かせボランティア募集
	2010年7月	茶道体験活動（社会・6年生）
	2010年8月	吹奏楽部の活動支援（クラブ活動）
第2期	2011年1月	民話学習（国語・5年生）、雅楽体験（音楽・6年生）
	2011年5月～2012年3月	他校読み聞かせボランティアに参加
	2011年6月	町探検引率補助（生活科・2年生）
	2011年7月～10月	クラブ活動（吹奏楽部）の支援
	2012年1月	人形劇開催（全学年）昔の遊びボランティア活動（1年生）
	2012年4月	読み聞かせボランティア募集
	2012年5月～2013年3月	他校読み聞かせボランティアに参加
	2012年6月	町探検引率補助（生活・2年生）
	2012年7月	国際交流協会からの問い合わせ
第3期	2012年11月	本屋ツアー開催
	2012年12月	コーディネーター交替の申し出
	2013年1月	新コーディネーターを打診
	2013年2月	新コーディネーターの紹介
	2013年3月	コーディネーター退任

※「Z小学校ボランティア活動経緯」（2014）から、筆者が作成。

初、Kさんは次年度始めに正式な活動の引き継ぎが行われると想定していたため、時期が繰り上がったことで焦りや心配が生じた。その背景として、自身の教員経験から「3月、4月は（人事異動等の関係で）目まぐるしく（学校の）様子が変わる。（校長は）引き継ぎが多過ぎて、本部事業のことは引き継ぎの書類に1行程度だと思った」（活動記録5）と考えていた。そのため、本部事業の活動や体制の変化に耐えうる事前準備の必要性を自覚した。

実際、Z小学校は2010年4月に校長と本部事業の担当教員が同時に異動し、またコーディネーターも交代し、前年度までの経験が十分ではない中でのスタートとなった。

3.1.2 1人体制のスタート

2010年4月から、1人で活動を始め、校長、担当教員はそれぞれ交代し、本部事業の打ち合わせをKさん主導で行うこととなった。また、短時間で要領良くできるように、話し合いの項目の洗い出しや、教員への周知のための資料作成に励む(活動記録2)。これについて、「活動を始めたばかりで、『(本部事業の活動内容について) どうしますか?』とただ聞いても、先生も困ると思った」(活動記録5)と、着手した要因を挙げている。

他方、後任の校長はKさんの教員時の元上司が着任し、「すごく話しやすく、頼みやすい。私をご存じの方で、とても救われた」(活動記録5)と感じていた。そのため、就任1年目から校長を介して教員とKさんの間で円滑な人間関係を構築し易い環境であったことは、活動を進める上でKさんを後押しした。

3.1.3 他校との調整とボランティアとの見解の相違

2010年7月になり、Kさんは「Z小学校の協力体制が整い遣り甲斐を感じ始めた」(活動記録3)。同月、Z小学校で初めて6年生の社会科の授業で「室町体験」として茶道を企画し、Z小学校の教員の伝手で茶道ボランティアを手配し活動の準備を進めた。しかし、Kさんは本部事業の壁にぶつかる。既に、Y中学校区の他校で行われていた茶道体験は市内の茶道協会を通してボランティアが手配されていたため、同中学校区内で依頼方法を巡り、コーディネーター同士で議論となる(活動記録1)。結果的に、従来の形態が重視され、Kさんは他校との調整に難しさを感じ、「(Z小学校の)教員の紹介で頼んだ方が(茶道ボランティアとして)認められず、本部事業の人選方法に疑問」(活動記録2)を持った。

茶道体験では、室町文化の体験を目的としてお茶を「点てる」ことに着目し、Kさんと担当教員の間で企画された。だが、茶道ボランティアの方針はお茶を「頂く」作法の意義を主張し、結果的にその主張を教員が受け入れ調整される。そのため、教員の目指した教科に位置づけた体験活動が重要視されることはなく、茶道ボランティア主導の見解で活動が行われた。教員とボランティアの間に位置するKさんは、活動の仕方やボランティアとの協働に対する難しさを実感した。

2010年8月に実施された吹奏楽部の活動支援では、2名のボランティアが配置された。だが、そのうちの1名が指導の違いに不満を持ち、ボランティアを辞める事態となった。教員や児童からは不満も出でならず、活動自体は円滑に進んでいた中で問題が生じたため、Kさんは一層「ボランティア同士の関わりに、配慮が必要である」(活動記録2)と強く実感した。他方、2010年11月頃から、教員の姿勢に変化が見え始め、「先生の中に『必要な時、ボランティ

アを頼んでいいんだ』という雰囲気が出てきた」(活動記録2)と実感し、教員とKさんの間で活動の見解が徐々に近づいていった。

3.2 第2期一学校・地域事情に対する葛藤とKさんの教育観の広がり

3.2.1 コーディネートに関する見解の高まり

2011年1月に、6年生の音楽科の授業でZ小学校で初めて雅楽体験活動が企画される。同様の活動は、既に他校で行われており、ボランティアも活動に慣れ調整が順調に進む。また、実施計画は他校の雛型を譲り受け「スムーズなボランティア体制、実施計画の融通により、(本部事業として)4校の取り組みの効果を実感」(活動記録2)した。また、同年7月から10月に行われた吹奏楽部の活動支援では、顧問が吹奏楽経験の浅い教員であり、楽器に精通したボランティアの支援を必要とした。Kさんは、支援を企画しその活動を確認した時「先生が、ボランティアの言葉をメモする姿勢が印象的で、積極的に関わっており、子どもとの関係も良好」(活動記録2)な姿を目の当たりにする。そのため、本部事業を通して児童へのボランティア活動と共に、「先生の(支援をする)ためのボランティアがいてもいい」(活動記録2)と強く実感し、ボランティアによる教育効果を捉える視点が、それまでの児童中心から教員も含む学校全体へと拡大していった。

このような幾つかの発見がある中、2011年6月に行った2年生の生活科で企画されたX市内をめぐる「町探検」では、引率のボランティアが商店街から児童の言動に対し注意を受けるトラブルが発生する。この事態に対し、Kさんは「ボランティアへの事前の打ち合わせ不足、子どもへの指導不足が原因」(活動記録2)と考え、活動の事前の取り組みの重要性を実感する。また、「問題を起こさないための事前準備、起きた時の対処法、両方の備えが必要」(活動記録2)と感じ、活動の企画立案だけではなく、事前事後に対する準備についても意識し、活動の一連の流れを一層注視するようになった。

3.2.2 教育観の広がり

2012年1月に、ボランティアから人形劇の開催が提案される。ボランティアからの提案は初めてであり、Kさんは積極的な提案を受け実施計画と開催案内のチラシを作成し、また、教員に協力を依頼しZ小学校の昼休みの時間帯を活用し実施された。この取り組みに関し、「活動の様子を校内に掲示し、子どもとボランティア双方が、次回(の活動)も楽しみになるようにした」(活動記録2)というように、一過性の取り組みにすることなく、継続的な活動が可能となるように配慮した。他方、同時期に学校から「昔の遊びボランティア」を依頼され企画

学校支援活動における意味づけの重要性

したが、「今の祖父母は働いている人が多い、お嫁さんが祖父母に通知を見せない等、諸事情がある。町会長によっては、募集依頼を地区に知らせない」（活動記録1）状況を受け、改めてボランティア募集の難しさに直面する。このような中で、丁寧に地域を歩きコーディネーターとして活動してきた結果、「買い物先等、日常の中で（ボランティアと）会うと、互いに言葉を交わすようになり、自分の世界の広がりを実感」（活動記録2）し、また児童から「通学路で会うと、『今度、読み聞かせはいつ？ また来てね』と言われ励みになる」（活動記録4）と、Kさんは就任後1年半を経過した頃に、はじめてこのような地域の中での自身の立ち位置に気付くことになった。

3.2.3 活動に対する教員との温度差、橋渡し役となる意義

2012年4月に、新年度の活動に向けて読み聞かせボランティアの募集をする際、保護者に活動を周知してもらい参加者を増やすための呼びかけを試みる。しかし、新体制となったZ小学校の見解は、活動に慣れた既存のボランティアのみで可能な範囲の活動を要請し、Kさんは試みを断念したのである。毎年度変化する状況下で、コーディネーター間の意見のすり合わせや、毎年度学校との関係性を構築する難しさに触れ、活動を継続させるための課題に直面したのであった。

同年6月に、Kさんの就任後2回目となる町探検が実施された。前年に、トラブルを経験したZ小学校のボランティアは参加に難色を示し、他校に応援を要請した。町探検では、ボランティアの他に参加する児童の保護者も引率したが、「自分の子どもと一緒に班にならないと、（引率に）協力しない親が多くて驚いた」（活動記録2）。それと同時に、そのような状況を見たボランティアもまた保護者の態度に疑問を持ち、担当教員が調整に困惑する。それらを受け、Kさんは「先生が困る現状に、協力できることはやると決意」（活動記録2）し、年度初めに落胆した経験を払拭し、改めてコーディネートの重要性を認識し活動に取り組んでいった。

7月には、市内の国際交流協会の会員から英語の読み聞かせの申し出があり、Kさんは学校に提案するが、「子どもに良い機会だと判断すれば、すぐに取り入れてくれる」（活動記録2）と感じ、活動における団体との接続もコーディネートした。この時、「地域活動を行う人も活動場所を開拓でき、学校と地域の橋渡しができて良かった」（活動記録3）とコーディネーターとしての活動の成功を実感していった。

3.3 第3期—Z小学校独自の活動の展開—

3.3.1 Z小学校独自の活動の展開に向けた取り組み

2012年11月に、「栃木にも雰囲気の良い本屋がある」とのボランティアの声を受け、Kさんが希望を集約し市内から1時間程の位置にある本屋を巡るツアーを企画した。この企画は、「(Y中学校区内の)4校の繋がりを考えると、まずは綿密な計画を経て、次に全体に呼び掛けて参加を募り実施する、という流れになるのが分かっていたので、(ボランティアの意欲を大事にして)Z小で独自に行う」(活動記録2)と考え、従来の4校での調整は行わなかった。2010年の就任当初、人選の仕方や他校との調整の難しさを感じていたKさんは、この活動で初めて独自色を出し活動を展開した。その時の状況について、「思い立ったら即行動に移したので、参加者には好評だった」(活動記録4)と感じ、より小回りのさく活動を推進した。また、「タイミングを逃すと、立ち消えになる。実際に活動すると、本部事業の活動(に関する話題)以外にも、若いお母さんから子育ての悩みや仕事と両立する中での活動の重要性等について(の話題が出て)、多くの話げできた」(活動記録6)と実感していた。

このように、通常の活動では情報交換し難い多様な話題の中から、ボランティア自身の動機づけを向上させていくために配慮し、継続的な活動支援へと繋げていったのである。本部事業として活動を展開する際、他校との協働関係と調整の困難な側面は表裏一体であり、Kさんはより参加者に近い立ち位置から企画し実行に移し、ボランティアとの関係性を良好なものにしていったのであった。

3.3.2 コーディネーターの引継ぎ、ボランティア活動の継続

2012年12月に、Kさんは校長にコーディネーターの交代を申し出、校長から後任決めを一任される。後任は、読み聞かせ等の主要な活動をしていたボランティアから選任した。その際、自身が引継ぎの際に苦勞した経験を踏まえ、「新コーディネーターが活動し易い組織にするためには、1人ではなく複数配置でも良いと考え、本部事業の打ち合わせで報告し了解を得た」(活動記録5)ように、引継ぎの際に新たな提案をし、コーディネーターの負担軽減を目指して3名体制での実施を検討した。そして、2013年2月に教員やボランティアに後任のコーディネーター3名を紹介し、校内掲示や学校通信で広報し同年3月に退任した¹⁰。

Kさんは、コーディネーターとして関わる一方で、2011年5月から2013年3月まで他校の読み聞かせボランティア等にも参加し活動した。その中で、「(Z小学校より)大規模校の活動に参加し、より多くのボランティアと接する際の作業効率や連絡方法、対応が参考になる」(活動記録4)とふり返り、ボランティアの立場で関わることで得られた経験を蓄積させた。また、

学校支援活動における意味づけの重要性

それを踏まえ「様々な考えに触れ、ボランティアのスタンスを知った方が良い」（活動記録5）と感じ、状況が変化する中でのボランティアの言動の変化を、同じ立場から学んでいた。更に、「活動内容の確認、関係者間の質問の機会の確保等、学校の対応の違いに驚いた」（活動記録5）ように、他校のコーディネーターの実践方法を直に学び、Z小学校での活動に活かす着眼点を見出していた。そのため、Kさんはコーディネーターとボランティアの2つの立場から、本部事業の活動を経験し自身の実践に活かしたのであった。

このように、Kさんは異なる立場を踏まえ学習の機会を得ており、両面を踏まえた多様な観点から活動に触れ実践を行っていた。コーディネーター退任後、現在はZ小学校のボランティアとして活動を行っている。

4 分析—Kさんの学校支援活動における意味づけ—

前章で、Kさんの活動の展開から、多くの出来事や葛藤を経験しながら活動を続けてきたことを確認した。Kさんは、コーディネーターの活動をふり返り「コーディネーターと同時進行で、Z小学校のPTAの学年部長やY中学校の部活の保護者会の会長を引き受けて活動」（活動記録5）しており、その中で「学校の立場が1つでも理解できれば、あとはボランティアの所を手厚くしようと思った…凄く自分から切り拓く部分が沢山ある」（インタビュー記録2014.8.19）と語っていた。

そのため、本章では、その中で特に第1期の「茶道の体験活動の企画」（前章3.1.3参照）と、第3期の本屋巡りツアー企画による「独自の活動の展開」（前章3.3.1参照）を取り上げる。その理由は、次の通りである。

前者について、Kさんは「私が3年間引き受けた中で（担当教員やボランティアに対して）一番申し訳なく…私たち（コーディネーター）が批判されてもおかしくない内容の出来事」（インタビュー記録2014.8.19）と述べており、ボランティア（講師）との協働の難しさを最も強く実感していた。また、後者は「（ボランティアの）皆の関心のある事を、どんどん自分で仕掛けても良いと切り替えました」（インタビュー記録2014.12.25）と語っており、それぞれの出来事を通してKさん自身の意識が変容していたことが伺える。

したがって、以下ではKさんのインタビュー記録を活用し、学校支援活動における意味づけを検討する。尚、内容を補足するものとして活動記録を適宜使用する。

4.1 教育活動の意図や意味を確認し、今後の展開へと繋ぐための環境づくりの必要性

Kさんは、茶道体験活動のコーディネートの経緯や状況について「個人にお願いできることと、(地域の)組織を経由しないと動けないことがあります…学校はそれを気にしないので…学校の意図と茶華道協会が受け止める所が全然違う状態で、茶道体験は(今までで)一番難しかった」(インタビュー記録 2014.12.25)と述べ、次のようにふり返っている。

学校は茶華道協会の仕組みが分からず、依頼すれば可能とっていて、(担当教員が当初依頼した)ボランティア講師も「(引き受けても)良い」と言えばできるとしていました。私も全然知らず「学校が(ボランティア講師を)頼んだので良い」と思いましたが…(コーディネーター委員会で)他校のコーディネーターから「X市の行事で小学生対象に教えると、『なぜあの先生を推薦したのか?』『どういう考えで企画したのか?』と常に問われる地域柄で、4校で活動しているから(茶華道協会を通して)進めた方が良い」と指摘されました。(インタビュー記録 2014.12.25)

Kさんは「教員だった時に、学校に(地域から)講演に来る方はいましたが…私は…地域のボランティアや講師との関わりがなかった」(インタビュー記録 2014.12.25)、「半年の間に、(他校のボランティア活動やコーディネーター委員会への参加を通して)それぞれの学校の考え方を学び…Z小学校の雰囲気は、自分の子どもが通っていて分かっていたので…他の学校とどのように調和し、照らし合わせて進めなければいけないのかを感じ取ったけれども…(その上で)Z小学校に対して、自分が何をすれば良いのかということは全く分からなかった」(インタビュー記録 2014.8.19)と語っている。このように、地域での活動経験や学校支援活動への経験が十分ではない中で、コーディネートの方法を模索しながら対応することになった。

そのため、コーディネートの仕方を把握することはもとより、学校の依頼内容をもとに他校や地域の実情への配慮まで、十分に想定しきれなかったことが伺える。その結果、Kさんはコーディネーター委員会の中で進め方を再考するよう促され、担当教員もまた調整が必要な場合の対処や進め方が分からず、Kさんに「うまく事を収めて下さい」(インタビュー記録 2014.10.31)としか伝えられなかった。その中でKさんは、企画の練り直しを一任されることになり、他のコーディネーターの助言を受け、当初依頼したボランティア講師への対応と茶華道協会が派遣するボランティア講師との打ち合わせを、同時並行で進めなければならない状況に置かれたのである。

実際の打ち合わせに臨んだ際には、「(ボランティア)講師は相当の(茶道)経験があり、(自分の考えを中々)譲れなかった」、「担当の先生は(自分の考えを取り下げ、ボランティア講師

学校支援活動における意味づけの重要性

に) 1時間全てを任せ…茶道体験ができれば良いという感じ」(インタビュー記録 2014.12.25), 「(少なくともボランティア講師には) 物質的に(学校の)先生が譲れない部分や予算, (茶道体験に相応しい服装等)を買って揃えさせないなど)子どもの現状に合わせてもらった」(インタビュー記録 2014.10.31) という発言にあるように, 教員と講師の考え方をすり合わせにくい中で, 児童が無理なく参加できるような環境づくりに配慮したのである。

こうした経験をふり返り, Kさんは次のように述べている。

茶道の時の様な方が学校に関わると, (本部事業の活動に対して, 徐々に要求が増えるのではないかと) 少し心配になります…先生や子ども, ボランティア(や講師)が変わってもできる体験(にすること)が大切ですし…長く続けるには…学年や先生に応じてやり方も変わることを(ボランティアに)伝える必要があると思いました。

(インタビュー記録 2014.10.31)

教員生活では, 学校の全ての行事で進め方や役割分担等の大元の実施計画に沿って指導するという経験をしましたが, 学校は常に(活動)内容は, その時の担当者の考えや力量で膨らませたりカットできます…育成会やPTAの時も同じで, 実施計画を残しました…各学校のやり方がありますが, 元の計画があれば先生やボランティアが変わってもできると思います。

(インタビュー記録 2014.12.25)

(自分が)コーディネーターを引き受ける時に, 何に関わるのかについて, はっきり説明を受けない状態で始めてしまったので…その後の人が引き受けても, 記録を残しておけば…仕事の進め具合が変わってくると思って用意しました。

(インタビュー記録 2014.8.19)

Kさんは, 継続的で実施可能な学校支援活動を念頭に置いており, 「他のボランティアが引き受けてもできる内容」(活動記録5)を企画することが重要だと気づいたのである。また, 学校支援活動を実施する際の前提として, ボランティアや講師は学校内の教員の異動や担当者の変更, 児童の様子が毎年変化することを認識し, その上で学校支援活動を実施することを伝える必要があると実感した。

その結果, Kさんは教員と事前の打ち合わせをする際に, ボランティアの生活状況, 活動実績のほか, 教員の依頼内容と活動の意図を確認して実施計画を作成した。そして, それらを踏

まえてボランティアと、学校の意向や教員の希望、日程や授業の進行方法、実施後の校長や教員、児童との懇談の有無などを丁寧に確認しながら進めるようになっていった。

このような活動の進め方の変化の背景には、Kさんは自身の教員経験から学校の教育活動が実施計画をもとに柔軟に活動を展開していたことを思い起こし、自ら実施計画を作成し残すという形でコーディネーターの活動に採り入れたことが伺える。また、Kさんは学校や地域の状況の変化に加え、コーディネーター自身の活動状況もまた変化することを認識しており、コーディネーターを含めた学校支援関係者の状況を考慮して活動の際の環境を構築しようと考えていたことが垣間見える。Kさんは、茶道体験でのコーディネートを経て、他校の実施計画を参考にしつつ、Z小学校の取り組みとして新たに実施する際には、活動と教育実践の結びつきを意識し、且つ、担当教員の意向を踏まえ、独自の実施計画を作成した上でコーディネートするようになっていったのである。

4.2 ボランティアのニーズを汲みとり、Z小学校の独自の活動を見出す

Kさんは、コーディネーターの活動だけでなく、他校のボランティア活動への参加を通して各校の取り組みや特性を学ぶ中で、Z小学校を取り巻く家庭や地域について、協力が得にくく（前章3.2.2参照）、「Z小学校のボランティアだけでは、十分に活動できない状況」（インタビュー記録2014.8.19）にあることを認識していた。

その中で、本屋巡りツアーの企画について「（自分は、他校とコーディネートの仕方や活動内容を詳細に）調整しないとできないと思っている所が多かったのですが、なかなかない機会なので思い立ったら即行動に移しました。（この時期は、子どもが元気に学校に通っていて、道路状況も良いため）時機を逃すと皆のタイミングも合わないという直感と、ボランティアが必要としていることを考え、皆の話しぶりや雰囲気を見ていると、絶対に乗ってくれるという確信がありました…『Z小のボランティアの企画』として、Z小の読み聞かせに関わる方の独自の活動として、学校の先生と私で調整して動こうと（考え方を柔軟に）切り替えたんです」（インタビュー記録2014.12.25）と振り返っており、次のように述べている。

自分が（教員として）クラスを受け持っていた時も、生徒から色々意見が出ることを待つよりは、「今度こういうことをやるよ」というのを皆に訴えかけて乗ってもらうという学級経営が多かったので、何もしていない時間が勿体ない。根本的には、きっかけさえあれば行きたいという人はいるだろうと、私の頭の中に（ボランティアに対する考えが）ありました。
（インタビュー記録2014.12.25）

他校は（規模の）大きい学校もあり，老人会等の地域の母体が強固で人は集まりますが…（ボランティアが）他所から最初に来た時（既に活動するボランティアから）「どこの方？」と見られ…入れる状況を作れなかったり，学校内（の関係者）で（協力者を）収めようとしていたので，（関わりたい）気持ちがある人が皆参加でき…年齢が違ってても対等に活動することを目指しました。Z小は（保護者や地域住民の中でも協力的な方はいるものの，全体的に）保護者の協力が少ないですが…他所から来てもやりたい人が参加できます…（今は他校より）一番広範囲（な地域）からボランティアが集まっています。

（インタビュー記録 2014.12.25）

（コーディネーターは）最初は依頼を引き受けるという受け身でも，自分の中でイメージができる自分から持ちかけようという気持ちに切り替わりました。それは，ボランティアとの付き合いが長く人隣が分かると，この方はもっとやってくれと伝わるんです…自分自身が楽しいからだと思うのですが，ボランティア自身も最初は（受け身の姿勢で）頼まれても，やってみたら楽しい時間だったと思ってもらいたいという気持ちになりました。

（インタビュー記録 2014.12.25）

Kさんはコーディネーターの活動の中で，ボランティア同士の関係や保護者に配慮する必要性を感じ取っており（前章3.2.3参照），これらの発言に見られるように，ボランティアの状況を見極めた上で，ボランティアの日々の過ごし方に配慮し，興味関心に基づいた企画を提案しようと試みたことが分かる。また，他校のボランティアの受け入れ状況や自身のPTA等の活動経験を踏まえ，活動経験者には参加希望者を受け入れて対等な関係を築くことができるように開かれた活動にすると同時に，ボランティア個人が持つ可能性や関心を引き出すような働きかけが重要だと考えたのである。

企画を実施した際のボランティアの様子について，「本屋に到着後，各々が本を手に取り『どの本を選んだの？』，『これを（子ども達に）読んで聞かせたい』という話をしながら交流を深めていました。移動中は，高学年のお母さんが低学年のお母さんの悩みに答えたり，仕事をしながらボランティア活動をしている方が『職場のストレスの発散にもなり，楽しみ』という話が聞け，皆がどんな気持ちで活動に臨んでいるかをご一緒して（知ることができ），より仲が深まりました」（インタビュー記録 2014.12.25）と語っており，ボランティア同士で悩みを相談しあう姿や活動に参加する背景を知り，ボランティアの関係の深まりを通して，Kさん自身もまた保護者に対する理解を深めていたことを窺い知ることができる。こうした活動を通し

て、Kさんはボランティアの関心やニーズを中心に据えて企画を立てることで、ボランティアの活動への関心を高め、より一層充実した活動に繋げようとしていたのである。

4.3 コーディネーターの活動の意味と自分の培ってきた経験の意味との関連性の模索

コーディネーターとしての活動を通して、Kさんは教員、児童、ボランティアにとっての活動の意味を次のように語っている。

「教員の世界は狭い」と言われ、自分の専門知識は深くても専門外は分からないことも多く、そこをボランティアに教えてもらうことは、とても先生にとって大切な経験です。様々な経験の積み重ねで見識や人脈が増えると、先生自身が成長できると思います。私は、知人がいる地元での採用でしたが、(現在は)他地区採用で若手の先生が苦労しています…ボランティアと出会い…自身の体験として(教育活動に)取り入れると凄くプラスで…何年も積み重ね(ることによって)ボランティアを理解できれば、その繋がりが自分の財産になるということを知って欲しいと思いました。

(インタビュー記録 2014.10.31)

子ども達も利口で、口先だけで調子良く褒めているのか、心底褒めているのか、分かるんです…(学校外の日常生活では)全然関わりがない中で、自分のありのままの姿を見て言ってくれるボランティアの言葉に対して、子どもは更に頑張れるようなプラスの空気が流れていく気がします。

(インタビュー記録 2014.10.31)

ボランティアにとっては、自分に(ボランティアが)務まるのかと思い、1人では学校に参加しにくいこともあります。でも、自分が必要とされていることを肌で感じ一度きっかけを掴んだ人は、その後も、学校や子どもたちに接してくれます。

(インタビュー記録 2014.10.31)

これらの発言に見られるように、Kさんは自分が教員だった頃と現在の教員の状況が異なることを認識しつつ、学校支援活動におけるボランティアとの関わりが教員の力量形成の一助になると実感している。また、児童と保護者や地域住民にとっても、学校支援活動を契機に充実した時間が得られるだけでなく、活動の積み重ねを通して関係が構築される可能性がある取り

学校支援活動における意味づけの重要性

組みであることを理解したと考えられる。

その上で、Kさんはコーディネーターの活動について、「学校の要望に応えられるボランティアを探すのが一番の役割ですが、全く活動したことがない人には活動を始めるきっかけと、既に活動をしている人達には活動する中で自分自身のできることを増やすきっかけをつくるお手伝いをする事」（インタビュー記録2014.10.31）と述べている。このように、コーディネーターは学校や地域の要望やニーズを汲みとり、それに基づいて企画し実施するだけでなく、学校の意向や意図を踏まえつつも、ボランティアの可能性を引き出していく中で、企画内容や活動の幅を広げていくことも重要だと認識を深めていったのである。

こうした背景として、「自分の中では教員の経験があるので、色々な立場を考えた時に一番先生の立場に近いと思っていた」（インタビュー記録2014.10.31）、「担任として保護者の方と子どもの数だけお付き合いさせてもらい、鍛えられました…それがあるから、若い先生とやりとりする時にはこうしよう、自分がやってもらったことを返していこうということが、（自分の考え方の）基本としてあります」（インタビュー記録2014.12.25）と語っている。このように、Kさん自身が他校のボランティア活動やコーディネーター委員会に参加する中で学んだだけでなく、それらを踏まえて自身が持つ経験を、コーディネーターとしての活動に活かせるよう試行錯誤しながら、Z小学校での自分の役割を見出していったと考えられる。つまり、Kさんは自身の経験の持つ強みを生かせる部分を模索し、弱点を乗り越えようと努力を重ねる中で、自分自身の可能性を切り拓いていったと言える。

同時に、コーディネーターの活動を通して、Kさん自身の生活の変化について「子どもの保護者（として生活するだけ）だったら、保護者同士の繋がりや先生と保護者としての繋がりしかなかったのが、コーディネーターを引き受けることで、（Z小学校の子ども達のことを考えてくれる方々など）絶対に知り合えない方々と顔見知りになり、自分の生活の範囲があっという間に広がって変わりました」（インタビュー記録2014.8.19）と語っている。この指摘に見られるように、Kさん個人としての活動の意味においても、一保護者としての存在から、活動を通して人間関係が広がり地域の中で生活する一人としての存在を実感できるようになったと考えられるのである。

5 考 察

学校支援活動におけるコーディネーターの意味づけの重要性について、Kさんに内在化する意識を見てきた。これらについて、以下の2点が挙げられる。

第1は、学校支援活動の実施の可能性の追求と実践知の体系化である。当初、Kさんは前任者から十分な引き継ぎを受けられず、活動を模索する日々が続き、受動的な対応で臨むことになった。このような状況下において、活動を通して教員やボランティアと向き合う中で、学校側からの依頼をこなすのではなく、依頼内容を踏まえ活動の意図を確認することで教育実践に貢献するための配慮を絶えず思索し続けていた。

その際、教員やボランティア、そして児童の様子が流動的であることを踏まえ、学校側の考える教育実践の意図を受け止め、地域事情が強く反映された活動にならぬよう配慮することで、活動に関わる実践者が誰でも対応可能となるように意識している。また、そのための方法として実施計画の作成にも着手し、参加者がたとえ未経験であったとしても、「敷居を低く、間口を広く」活動を展開することで、ボランティア参加者を募り徐々に実践知を体系化していったのである。その際、実施計画の作成についてもマニュアル化を念頭に置いたものではなく、実践知を体系化し経験の有無に左右されることなく継続的な活動が可能となるよう配慮しており、活動中だけではなく活動後の展開も見据えた取り組みを行っていたと言える。

これらの活動を行う上で、Kさんの持つ教員経験も生かされているが、過去の経験を直接的に本部事業の活動に適用したのではない。むしろ、コーディネーターとして活動に向き合い、更に教員やボランティア、児童との関わりを通して、過去の経験が引き出されていたと言え、それらを現状の活動に照らし合わせ意味づけることによって、Kさんが活動に向き合う際に自身の判断を下支えしていたと言える。

第2は、他者に対する共感的理解の追求である。Kさんは、多種多様な活動を通してコーディネーターの立場や役割を自覚する一方で、教員やボランティアと同じ立ち位置で活動に向き合っている。そのため、教員の意向を丁寧に汲み取り、またボランティアに対しては活動の中に限定された対応ではなく、日々の過ごし方にも配慮し、ボランティア自身の持つ興味関心に基づく企画の立案を試みている。このような取り組みの中で、ボランティアが個々に持つ可能性や関心を引き出し繰り返していくことを通して、ボランティアの活動への参加が一過性にならぬよう継続的な連携の仕組みを築いていった。

同時に、活動がボランティアの自己実現の機会に終始することなく教員の力量形成や児童への教育効果の一助となるように位置付けている。この点に関して、Kさんは自身の教員経験を当てはめ検討するのではなく、状況が変化した中で教員や児童を受け止める際に、自身の経験を補助的に活かすことで活動の際に生じる個別具体的な事象に対応していったのである。また、本屋巡りツアー企画に見られるように、Kさん自身も参加しボランティアの参加者と時間や経験を共有したり、1人のボランティアとして他校で活動したりすることで学びを深めてい

学校支援活動における意味づけの重要性

た。これらの多様な立場から得られる新たな経験をもとに、コーディネーターとして活動を展開する際、必要な人材を募集し機械的に配置するのではなく、ボランティアの可能性を引き出しそれに伴ってKさん自身の可能性も高め、立場の違いを超えた理解を深めていく中で行ってきたと言える。

以上、学校支援活動における意味づけの重要性について論じてきた。コーディネーター自身が活動自体を意味づけることは、目的意識を明確化させることに寄与するが、それ以上に様々な背景を持つ本部事業の関係者がそれぞれの立場に合わせて活動に向き合い、具体的且つ継続的な取り組みを展開するために重要な要素となると考えられる。

ただし、Y中学校区は4校で本部事業を展開しており、コーディネーターも複数名配置されていることを勘案すれば、Y中学校区としての協働的な実践と共に各学校独自の実践との両面を体系化していくことが必要となる。本部事業に対する、学校区内の地域事情や文化の差異、各学校の状況及び事業展開の手法の多様性を踏まえると、コーディネーター間の合意形成が容易ではないことを認めつつも、各学校に配置されたコーディネーターが孤軍奮闘する状況に陥らないような取り組みを目指していくことが必要であろう。

6 おわりに

本部事業による地域のボランティアとの連携は、学校の枠に留まらない多様な活動を行う可能性を持ち、また、教員の負担軽減等の学校支援の点からも期待されている。その要のコーディネーターは、教員やボランティア、そして児童への活動を拡充すればするほど、人材確保や企画立案を含む、更に複雑化した役割を担うこととなる。そのため、活動に協力するボランティアの確保の方法や、高等教育による支援の可能性もまた検討される必要があると思われる。ただし、コーディネーターの持つ経験や人脈は、本部事業の活動の開始直後から効果的に活かせるものではなく、多くの活動から得られる経験によるふり返しを通して意味づけていくことで、コーディネーター自身が力量を高めそれらの総体として活かされてくるものであると思われる。

よって、コーディネーターが当初から持つ地域人材の多寡や学習促進のための政策的支援は副次的であると言え、継続的に活動に向き合い意味づけていくことを通して、力量形成が果たされていくのではないだろうか。そして、それらを通して本部事業自体の発展性や継続性を見出していくことが重要であると考えられる。

以上、コーディネーターの取り組みから、学校支援活動における意味づけの重要性について

論じてきた。今後は、コーディネーター間の力量形成の在り方や、活動が進展する中でのボランティアの意識変化を踏まえた活動の在り方の検討等が、課題として残されている。

本稿の文責は、以下の通りである。

第1章, 第4章, 第6章……西村 彩恵, 第2章, 第3章, 第5章……西村 吉弘

注

- 1 文部科学省「学校支援地域本部の取組を中心とした学校・家庭・地域の連携協力について」, 2014, 11頁。尚, 教育活動サポーターは約27,000人(1学校に平均3人, 1本部に平均8人), 教育活動推進員は約30,000人(同3人, 同9人), 無償ボランティアは約115万人(同133人, 同326人)である。
- 2 前掲1, 10頁
- 3 「①読み聞かせ」の活動回数は, 当初計20回の予定であったが, 台風接近, インフルエンザ流行, 金環日食, による中止があり, 計17回となっている。よって, 本稿では予定回数ではなく, 実施回数を掲載している。また, 「①読み聞かせ」の参加者は, 英語による読み聞かせボランティア3名を含む。
- 4 Y中学校区本部事業資料「平成25年度市民活動参画支援事業活動計画」(2013)参照。
- 5 尚, コーディネーター委員会の運営は, 年度毎にコーディネーター間で相談し弾力的に実施している。
- 6 Z小学校『学校概要』(2014)を参照。
- 7 「Z小学校ボランティア新聞」参照。尚, 2012年度は計9号発行された。
- 8 インタビュー記録は, 匿名性を守るためアルファベットを用いて表記する。インタビュー内容は, 再現性を保障するため全てICレコーダーに録音し, 逐語的に書き起こし内容確認も行った。本稿でインタビュー記録を引用する場合は, 次の凡例に基づいている。凡例:()は筆者による補足説明。発言中の「…」は前後の発言の省略。引用後の()はデータの出所, 記録した年月日。尚, 発言は文意を損ねない程度の修正を加えた上で引用している。
- 9 Kさんの「活動記録」(2014年8月~12月)の詳細は, 以下の通りである。
活動記録1「コーディネーターの観念の変化(イメージ図・変化の要因)」(2014年10月13日)
活動記録2「コーディネーター観の変化について」(2014年10月31日)
活動記録3「子ども観・地域観・学校観の変化」(2014年10月13日)
活動記録4「コーディネーターに要請される資質能力・支援に関する資料」(2014年8月19日)
活動記録5「ボランティア活動のふり返り①」(2014年10月31日)
活動記録6「ボランティア活動のふり返り②」(2014年12月25日)
- 10 後任のコーディネーターが決定後, 2013年4月から3名体制で始まったが, その後諸事情により1名退任し, 現在は2名体制となっている。

引用・参考文献

中川忠宣・山崎清男・深尾誠, 「地域との関わりによる子どもの学習活動の推進(Ⅲ)」, 『日本生活体験学

学校支援活動における意味づけの重要性

- 習学会』, 第 12 号, 2012, 1-9 頁
- 大久保智生・時岡晴美・平田俊治・福圓良子・江村早紀, 「学校支援地域本部事業の取り組み成果にみる学校・地域間関係の再編(その2)―生徒, 地域ボランティア, 教師の意識調査から―」, 『香川大学教育実践総合研究』, 第 22 卷, 2011, 139-148 頁
- 志々田まなみ・熊谷愼之輔・天野かおり・佐々木保孝, 「学校支援地域本部と学校運営協議会の連携の実態―全国アンケート調査の結果から―」, 『広島経済大学研究論集』, 第 37 卷第 3 号, 2014, 29-39 頁
- 佐藤智子, 「学校・家庭・地域の連携施策におけるコーディネーターの力量形成過程」, 『教育学論集』, 第 54 集, 2012, 65-95 頁
- 畠中宏, 「学校支援ボランティア・コーディネーターの役割に関する一考察―ソーシャル・キャピタルの蓄積に注目して―」, 『学校教育研究』, 第 26 号, 2011, 152-164 頁

Z 小学校参考資料

- 「人形劇実施計画」(2012 年 1 月 19 日)
- 「平成 24 年民話講座資料」(2012 年 1 月 20 日)
- 「読み聞かせボランティアと先生方へのアンケート結果」(2012 年 2 月 27 日)
- 「百貨店見学のお知らせ」(2012 年 11 月 19 日)
- 「平成 24 年 Z 小学校ボランティア活動記録」(2013 年 3 月 31 日)
- 「平成 24 年度全体の活動報告・読み聞かせ当番表・ボランティア一覧」(2013 年 3 月 31 日)

謝 辞

本稿の作成にあたって、資料提供及びインタビュー調査にご協力頂いたコーディネーターの方に、ここに記して感謝申し上げます。